

2008年(平成20年)

第11号

(11月15日)

# 平安月報

The HEIAN monthly report

発行所：立正佼成会 京都教会  
 発行責任者：渉外部長 宮地啓安  
 〒605-0041 京都市東山区三条蹴上  
 TEL (075)762-2211 FAX (075)762-2266

## み教えに出会えた喜びをかみしめる「開祖さま生誕会」

11月15日は、本会の開祖・庭野日敬が誕生した日です。

庭野日敬開祖は、1906（明治39）年、11月15日、新潟県中魚沼郡十日町大字菅沼（現新潟県十日町市菅沼）に生まれました。

人に尽くすことを喜びとした祖父・重太郎や「なるべく暇がなくて、給料の安い、骨の折れるところへ奉公するように」と諭す父・重吉らの教えを受け、16歳の夏に上京。その後、恩師である新井助信師や長沼政（のちの脇祖長沼妙伎）との出会いを経て、1938（昭和13）年、立正佼成会を創立、以来、法華経に帰依し、慈悲の実践に徹しました。

開祖は「真の平和は宗教心の涵養による以外にない」との信念から、「国民皆信仰」「明るい社会づくり運動」を提唱するとともに、世界の平和境建設をめざして、宗教者同志が手を携える必要性を訴え、国内外で積極的に宗教協力活動を展開。WCRP（世界宗教者平和会議）やACRP（アジア宗教者平和会議）の創設・

運営に力を尽くしました。さらに、過去3回行われた「国連軍縮特別総会」では、世界の為政者に非武装による平和を重ねて呼びかけるなど、世界平和の構築に情熱を傾注しました。

1991（平成3）年11月15日に「法燈継承式」を挙行し、長男・日鏡に会長位を委譲したのちも、ローマ教皇ヨハネ・パウロ2世と共にバチカンでの「WCRP6（第6回世界宗教者平和会議、1994年）」に出席するなど、世界の平和を目指して精力的な活動を続けました。

開祖の生誕会のこの日は、会員は人生の指針となるみ教えにただけただけの感謝と、開祖の歩まれた平和への道をひとり一人が歩むことを誓願する日です。



## 中央明るい社会づくり運動の会

11月2日、中央明社から「世界の京都・まち美化市民総行動」に11名が参加しました。京都市役所前でオープニング。河原町通一丸太町通一東大路通一三条通を清掃しました。



## 乙訓明るい社会づくり運動の会

10月19日、毎年続けている「世界平和の祈りと清掃奉仕」を小倉神社で行いました。宮司さん、氏子さん、泉ケンタ衆議員さん、中小路健吾府会議員さん、太田秀明市会議員さんと共に多数ご参加頂きました。おかげさまで境内も綺麗になり、また天王山への登山者や小倉神社への参拝者も多く、明社のPRになり、一緒に祈りと奉仕出来ましたこと感謝いたします。



中国の孟子が提唱した言葉に「王道」と「霸道」がある。武力と経済力で世界を制覇しようとしたブッシュ氏は「霸道」を選んだ。オバマ氏の考えでは「王道」を歩もうとしているようだ。釈尊に帰依したアシヨカ王は「法（ダルマ）の政治」を行い、人々の尊敬を得たと伝えられている。世界の超大国アメリカの指導者となったオバマ氏が世界の人々の信頼を得られることを期待する。

## 時事刻々

先日のアメリカの大統領選で初の黒人大統領・オバマ氏が選ばれました。現ブッシュ大統領の政策に対する批判と、国際的地位の低下・国民生活の困窮から、「変革」を求めた人々の心を射止めた結果だった。投票開票日を前にして、オバマ氏の母方の祖母を亡くした。期日前投票を済ませた後だったという。早くして両親を亡くし、高校卒業まで祖母に育てられた。大統領になった孫の姿を天国から見ているだろう。

私のほのぼの日記 (京都佼成議員懇話会に参加いただいている議員さん方のコーナーです)

ご縁を大切に

京都府議会 田中 健志

福山参議院議員の秘書時代、半年の間に両親を相次いで亡くし、全くの一人ぼっちのような気持ちになっている時期がありました。そんなとき福山議員からのアドバイスにより、佼成会にご縁をいただきました。

佼成会の教えを多くのことを学ばせていただいています。「諸法無我」の教えもその一つです。『この世のすべての物事は必ず関係しており、他と切り離されて孤立しているものはない』。この教えで、自分は決して一人ぼっちではない、という勇気をいただきました。自分と関係のないものはこの世に存在しない、すべて「ご縁」でつながってるんだと思うようになりました。

そして、社会で起こるあらゆる事象には必ず何らかのつながりがある。だから、すべて他人事ではなく、社会に役立てるようにと考え、人々との「ご縁」を大切に、日々努力していきます。

災害に強い街づくりを目指して！

京都市議会 隠塚 功

私は、今二期目の議員として活動しております。サラリーマンだった私が政治家を目指すきっかけとなったのは、あの阪神大震災でした。当時ゼネコンの社員として、復興事業に関わっていましたが、自治体のリスク管理や災害発生時、発生後の対応が被災者に向いておらず、被災者である市民に過度の負担がかかる状況を目にして、議会や議員の役割の重要性を意識するようになり、立候補しました。

議員になって5年、京都市災害ボランティアセンターの設立に尽力し、これを機能させるために各区の災害ボランティアセンター設立に努力してきました。

これは私の初心によるものですが、このように実現できたのは大きな喜びです。過去の災害を教訓に、今後はこの組織がしっかりと機能し、市民が安心して暮らせる街づくりを進めて参ります。

認知症の母と

宇治市議会 田中 美貴子

私は、幼いころから母が苦手でした。プライドが高く、負けず嫌いで、どこかで認めながらも素直に甘えることができない子供でした。それは、自分が母親になっても同じでした。

そんな母が物忘れをし、認知症の症状が出るようになってきたころから、まるで今までの生き方を忘れてしまったかのように、朝な夕なに電話をかけ、無理難題を押しつけ、甘え、依存するようになってきたのです。実家に行って、母との別れの際、手を振るその母の頼りなげな笑みは、とても愛おしく、私に命のつながりを訴えているようでした。

子供は、いやになるぐらい私に似てきました。私もまた母に似てきました。私たちは、そんな血のつながりを縦に、そして他人とのつながりを横に紡ぎながら生きているのだと、認知症の母を見て実感しています。

明るい社会づくり運動

中央明社バザー

初めての梅小路公園での開催でした。目の前には広い芝生があり市民の憩いの場には最適です。あいにくの雨模様でしたが、それでも通りすがりの方や観光客の方々が足を運んで下さいました。来年もここでお会いしましょう。



宇治明社バザー

宇治市明るい社会づくり運動の会(笠島教瑞会長・会員140人)主催の第19回福祉バザールが10月19日、市総合福祉会館前で開かれた。「明るく・楽しく・いきいきと」をテーマにしたバザールでは、38万8553円の収益金があり、市社会福祉協議会に全額寄付された。

1990年から始まった福祉バザールの収益金寄付の累計額は、819万9493円になった。



※今月号は「一食を捧げる運動」「諸宗教対話のコーナー」「佼成会ミニ知識」をお休みとさせていただきます。

## 仏教を生活に生かす

## 「日常生活の中の仏さまの教え」

### 生かされて生きる

今回は仏教の根本である「縁起」について学んでみたいと思います。法華経というのは「**因縁を悟ること**」であり、因縁ということが本当にわからないと、「仏教が光を発しない」と教えられています。因縁を悟る、それも「**仏教が光を発するように悟る**」とはどのようなことなのでしょう。

庭野開祖が、ある教会の周年記念式典に出席した時のことです。控え室でお茶をお出ししようとした女性が、緊張と慣れない和服のためでしょうか、テーブルにお茶をこぼしてしまいました。その場に居合わせただれもが、アッと息をのんだその時です。

「ほら、見てごらん。こぼれたお茶が末広がりになっている。今日を機に、教えがますます広がって行くという印だよ。仏さまが喜んでいなさる。有り難いことだ。おめでたいことだ」と、庭野開祖はにこやかに言われたのです。

その言葉を聞き、緊張していた皆の心がほっとしました。と同時に、今日というおめでたい日を共に迎えられることを、心から有り難く思えました。接待した人の心を大事にし、失敗のように見えることから喜びを見だし、すべてを生かそうとする見方、そしてその心にふれ、その場が一転して温かく和やかになりました。

**とらわれのない目でものごとを見れば、変化がよく見える。**その変化に素直に従うのが、正しい生き方である。一瞬の出来事のなかで、なぜとっさに、そのような、まわりが嬉しくなる温かいひと言が言えるのでしょうか。

それは単に、そういう人柄であったというだけではありません。すべての縁ある人を、**生かそう、目覚めさせよう**という「**仏さまの願い**」を、いつも自分の生き方の中心にしておられたからです。

私たちは「**すべての人を生かそう**」としている仏さまの願いを、「**縁**」によって知ることができます。「**縁**」とは、私たちの周囲で起こるすべての出来事、すべての人たちのことです。

庭野開祖は、常に目の前の人を喜ばせようという「**慈悲の眼**」で見て、すべての縁を生かす「**智慧**」のはたらきをすることで、仏さまの願いを実現し、その温かさで周囲を照らして下さったのです。

私たちは、分かっている、そう簡単に自分の心を変えたり、行いを改めることができないものです。

また、どんなに努力しても変わらない、変えられないことにもぶつかります。

こんな話があります。そのお母さんには、二人の息子がいます。長男は人工透析を受けています。次男には恋人がいますが、家には連れてこようとしません。

「幸せになりたい、そう願って信仰をし、今日まで頑張ってきた。けれど、長男の病気は良くなるしないし、次男は彼女を連れて来ない。どうしてこんなに心の通わない家族になってしまったのだろう。いったいつまで修行をすれば、我が家は救われるのだろう」母親はあるとき、みんなの前でそんな悩みを打ち明けました。

すると、こんな言葉を頂きました。「昔なら助からないような病気でも、医学が進歩したお陰さまで、いま長男さんは生きることが出来る。次男さんは、きっとお兄さんに遠慮して、恋人を連れて来ないのですね。やさしい息子さんね。そんな幸せな、素晴らしい息子さんたちを育ててきた、あなたは素晴らしい母親なのね。いいご家庭ですね」

本当にその通りだと思いました。母親の目に涙があふれ、心が温かいものでいっぱいになりました。そしてその晩、嬉しい思いを手紙に書き、息子たちに渡しました。

翌日、「母さん、手紙ありがとう。本当に嬉しかったよ」と、息子からかけられたそのひと言で、しみじみと幸せを感じました。母親が感じた温かいものとは、何だったのでしょうか。

長男の透析生活が終わることはないかもしれませんが、次男の恋人が家を訪れる日が来るかどうかはわかりません。けれども、この息子たちと縁があったからこそ、自分自身も母親として生かされていた。息子の幸せを願うことで、今まで頑張ってきたことができた。**支え合い、生かされていたのです。**

今ある「**縁**」によってこそ、生かされて生きていることを感じ取っていくこと、それがお釈迦さまが悟られた**縁起の教え、縁起の世界**です。それは大乘仏教である法華経の見方です。因縁をこのように悟ると、**仏さまの教えが光を発する**のではないのでしょうか。

**《仏教の教えというものは、つきつめていくと、天地すべてのものに支えられているという実相、目に見えないものに生かされているという実相を、われわれにわからせるためのものなのです》**

## 庭野開祖の宗教観・平和観 「一乗の道」

### 平和に取り組む宗教者

世界宗教者平和会議は、世界の主要宗教の指導者の有志によって構成された実行委員会と、日本宗教連盟(日宗連)との共同開催で、会議の実務は日宗連国際問題委員会が担当していた。

庭野開祖は国際問題委員会の委員長としてあいさつに立った。「宗教を異にするがゆえに対立するのではなく、人間の幸福と救いという共通の願いを持つ宗教であるからこそ、私たちは協力して、平和のために貢献しなければならないのです。宗教者は何をなすべきか、何ができるかを、この会議において真剣に語り合いたいのです。信頼による話し合いが友情を生み、それが宗教の壁を乗り越える宗教協力が高まり、世界会議を実現されるまでに育ってきました。

これは、ただひたすら人類の幸福に貢献する宗教者として、何をなすべきかの一点に絞って力をあわせたことで可能になったものです。この会議を実現させた力が、そのまま世界の平和を実現させる力につながっていると思うのです」

広島と長崎に投下された二発の原子爆弾は、人類全体に対して、このままの考え方でものはや生き残ることが不可能であることを教えた。核兵器の想像を絶する破壊力のすさまじさを、日本は人類史上初めて体験する国となった。いま、その百万倍もの破壊力をもつ核兵器が、この地球上に存在するのである。もしも全面戦争が起こったとしたら、地球そのものが破壊され、だれ一人生き残ることはできない。

もはや地球上には敵も見方もなく、世界全体が一蓮托生の運命でつながっているといえよう。その世界が、いまベトナム戦争によって東西に真っ二つに分かれ、一触即発の危機に直面しているのだった。まさに「細い糸でつるされて、いつ頭上に落ちてくるかわからぬ核兵器という剣の下で人類はおののいている」(ケネディ大統領)状態であった。

第一回世界会議は、全員が参加する全体会議と、「非武装」「開発」「人権」の三つの研究部会で構成されていた。研究部会で取り上げた三つのテーマは国連をはじめ世界の平和活動の専門家が取り組んでいる大問題でもある。このテーマを私たちが選んだのは、それが国際政治によって解決されなければならない大問題で

あると同時に、国益を超えたより高い人類愛、より深い精神的次元からの洞察なしには解決することができない問題であるとする視点に立ってのことであった。

これまでも、宗教者が平和について論じる会議はいくつかあった。しかし、その多くは精神的な面から平和を論ずるだけに終止しがちで、平和を妨げる現実問題の前に、宗教者は有効な提言をなしえずにきたのが実情であろう。

もちろん、一人びとりの内面的な平和なしに世界人類の平和はありえない。しかし、それだけでは平和は実現しない。平和を妨げるさまざまな現実を変えて行くために、宗教者はどれだけの力をもてるのか。その問いを、世界宗教者平和会議はみずからにつきつけたのであった。

### 真の救いをめざして

日本の宗教界が、この「平和のための現実的な実践に踏み出す会議」に取り組む勇気をもったのは、アメリカの宗教者の働きかけがあったからであった。キリスト教を中心として、欧米の宗教者のなかには、心の平安を説く福音派と、現実の社会の改革に取り組む社会派の二つの流れがある。いわば『内なる平和』と『外なる平和』で、真の救いにはその両面が必要なのだが、いずれを優先させるかで考え方が分かれ、行動が分かれていた。

いっぽう、現実の世界は、社会主義による国づくりをめざす共産圏と、自由主義を守ろうとする自由主義国の対立が高まり、その東西対立の頂点に立つ米ソ両国が、経済的に自立することができずに内紛をつづける発展途上国に対して援助という名目でかわり、逆に紛争を助長して内戦に至らせてしまうといったケースが、アジアやアフリカをはじめ、中東、中南米につぎつぎと起こっていた。

ベトナム戦争はまさにその典型といえた。「この世界は、第二次大戦で恐ろしい犠牲をはらいながら、性懲りもなく、ふたたび世界戦争に向かって走り始めているのではないか。世界の宗教者は、そのことに共同責任を負わなければならない」それがユニテリアン・ユニバーサリスト協会会長ディナ・グリーンリー博士、ホーマー・ジャック博士をはじめとするアメリカの宗教者の問題提起だった。(つづく)

### 渉外部からのメッセージ

スポーツの秋、食欲の秋、芸術の秋…と様々な秋がありますが、京都教会では「明社の秋」といったところでしょうか、各地区でバザーや清掃奉仕などの催しがありました。会員さんたちが笑顔で市民の方々へ明るいふれあいをされている姿が印象的でした。

お忙しい中にもかかわらず議員の方々各地区へお越し頂き有難うございました。紙面ではご紹介出来ませんでした。ここでお礼とさせていただきます。

この月報を読まれて感想などがありましたらお気軽にお寄せ下さい。 RKK 京都教会 FAX 075-762-2266